

スマイルサポーターの 取り組みの中で

社会福祉法人日本コイノニア福祉会 理事長 **小林 達夫** (保-5期、No.794)

久宝まぶね保育園 園長 **五十嵐 宏枝**



1. できる限りの努力で支援する

「子どもを抱えていて働く事ができないのです。助けてください。」

1950年代の終わりのことであった。自宅を改修して、キリスト教の伝道所を開設して間もない頃、一人の婦人がこうして尋ねてきた。神学校を出て間もない牧師は、聖書の「この最も小さいものの一人にしたのは私にしたのである」(「マタイによる福音書」25章40節)を思い起こし、自宅の一部を改良してベビーセンター(無認可保育所)を開設し、この母子を助けた。

このセンターを支えるために、教会婦人や当時伝道所で青少年活動の一環として行っていたボーイスカウト、ガールスカウトの保護者の応援も得て、15年後の1974年に社会福祉法人日本コイノニア福祉会の設立認可を受け、定員30名の久宝まぶね保育園を設立した。「まぶね」とは、イエスが誕生したの時の馬小屋の中の飼い葉おけである。私たちの法人は、ベビーセンターの設立時がそうであったように、できる限りの努力で保育園に入りたい人を支援する意味でこの名前をつけた。はじめに相談を受け止めた牧師が現在の理事長である。

現在の法人は、保育園5施設、大阪市の公立保育所業務委託1か所、特養2か所の運営

を行っている。乳児保育園から始まった久宝まぶね保育園は、行政からの待機児童の解消の要望もあり、2014年度には200名定員へと大きくなった。同時に、念願だったフリースペース(地域交流スペース)も整備し、園児でなくても保育園に来ることができるなど、保護者や地域の人達との交流の場を設けている。

昨今、社会福祉法人のあり方が問われ、一般の企業との違いが論議されるようになってきた。私たちはその答えのひとつとして、社会福祉法人による「地域貢献」を伝え続けている。

2. 保育園で取り組む「地域貢献」とは何か

「スマイルサポーター」とは、大阪府社会福祉協議会保育部会が養成・推進する、子育てに限らず、介護、仕事、家庭、病気などさまざまな悩みを伺う地域貢献支援員の愛称である。必要に応じて関係機関との連携によって課題の解決をめざす。

当園では、現在の園長がはじめに育児相談員の養成講座を受講した後、スマイルサポーター養成講座を受講した。地域福祉や生活保護などの各種支援制度について学んだものの、日頃は関わっていない制度や分野については「一度受講しただけでは十分に分からない」が、率直

な感想であった。とはいえ、制度のことや専門分野以外の相談など不得意な部分はあっても、支援の本質においては今取り組んでいる事と大きな違いはない。『認定証』を保護者の見えるところに掲示し、保育園の玄関には『スマイルサポーターがいる保育園です』という看板を掲示している。(右図参照)

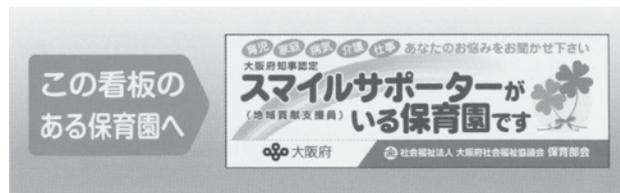
大阪府社会福祉協議会が作成したポスター(次頁)には、「悩んだときは保育園が力になります」と大書されている。中には、保育園が得意としない分野の課題も表示されている。幸いなことに、当法人では介護保険施設を運営し、連携している障がい者施設もある。法人内の研修でも確認していることだが、施設利用者や相談に来た方を「保育園だから保育の事しか分からない」と門前払いにすることなく、どのような相談でも受け入れ、解決の為に適切な関係団体に繋げることも大切な使命だと学んでいる。

3. 支援ケースから

具体的な支援ケースをいくつか紹介する。必ずしも円満に解決できるケースばかりではない。

生活困窮者への支援として、姉妹園と一緒に対応したケースがあった。園児の父親が突然解雇され、日系外国人のためなかなか仕事が見つからないという。そこで、当法人で運営する隣接の特別養護老人ホームで行っている生活困窮者支援事業からの援助で、住宅賃貸のための資金を確保して園児の家族のための住宅を借り、同時にその園児の両親の仕事も、特別養護老人ホームで雇用を行った。

保育園を利用している家庭の支援として、保護者の体調不良により園までの送迎が不可能な場合は、子どもを迎えに行き、少しでも保護者の回復につながるようにも支援している。また保育料や諸費を滞納がちになった保護者には、仕事が見つかるまでの提案として、保育園の給食後



保育園の玄関に提示する看板の案内

の食器洗いをして頂き、その給料で保育園の諸費を分割で支払いいただいたこともあった。

ある家庭は、子ども家庭センターの勧めから保育園への入園となった。それでも保護者には気持ちの中で葛藤があるようで、保育園には数日登園しただけで来なくなってしまった。電話をかけて繋がらない、家庭を訪問しても玄関を開けていただけない、という状態である。子ども家庭センターや兄弟が通学している学校とも連絡をとっているが、なかなか改善に向かえていない。兄弟も学校を休みがちだという。このケースは、関わりが始まったばかりのケースで、まだまだ時間を必要とすると思われる。

卒園後も、子どもの見守りと同時に命の大切さと人との交わりを持てるように、釜ヶ崎の人達と農業を行ったり、障がい者との共生をめざして作られた奈良県内の施設「フランテイスコの山」でワークキャンプも行っている。

当園では、「スマイルサポーター」の認定を受けている保育士は数名在籍している。これから「スマイルサポーター」として活躍するために、はじめに育児相談員の養成講座に参加している保育士もいる。正直なところ、認定を受けても、実際に相談を受けた場合にどう動いたらよいか戸惑うこともあるようである。それでも法人の理念である「小さくされた人に寄り添い」、支え、「久宝まぶね保育園を頼りにし、訪ねてくださった方に、少しでもお力になりたい」という共通の思いをもって頑張っていきたい。

